

主題	最期まで当たり前の生活を！駒場苑流・看取り術		
副題	住み慣れた場所で、その人らしい最期をむかえるために		

看取り	職員の意識変化	研究期間	33ヶ月
-----	---------	------	------

事業所	特別養護老人ホーム 駒場苑		
発表者：加藤 紗妃里（かとう さぎり）	アドバイザー：坂野 悠己（さかの ゆうき）		
共同研究者：千田 真歩（ちだ まほ）			

電話	03-3485-9823	E-mail	komabaen@coda.ocn.ne.jp
FAX	03-3485-9825	URL	http://komaba.mdn.ne.jp/

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	所在地：〒153-8516 東京都目黒区大橋2-19-1 定員57名 開設：平成元年12月1日 当施設では「隣人愛」という法人理念から、「寝かせきりゼロ」「オムツゼロ」「機械浴ゼロ」「誤嚥性肺炎ゼロ」「脱水ゼロ」「身体拘束ゼロ」「下剤、精神安定剤ゼロ」という“7つのゼロ”をケア方針に掲げ、介護の質の向上に取り組んでいる。
------------------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

駒場苑では、3年前まで看取りは対応していなかった。しかし、平成23年9月に、誤嚥性肺炎にて入院し、病院で看取り対応となっていたご利用者のご家族から、「母を駒場苑で死なせて下さい」という希望があり、急遽、当時の医務主任と施設長で話し合いを行い、嘱託医の先生にも経緯を説明し、協力して頂いた。その結果、体制自体は未整備だったが、何とかその方を看取る事ができた。この事をきっかけに、駒場苑で看取りの体制を整え看取りを行う事となった。体制作りとしては、二人体制だった嘱託医を看取りの対応ができる医師一人体制にした。また、看取りマニュアルを作成し、夜間夜勤者一人体制のため嘱託医のオンコール体制を整えた。しかし、体制を整える事にばかり気がとられ、肝心の看取り時期に入られたご利用者へのアプローチは不明確だった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

体制を整えた上で看取りの対応をさせて頂く中

で、看取りの時期に入られたご利用者へどのようなアプローチをすれば、その人らしい最期を過ごして頂けるか見つける事ができ、駒場苑で看取りを希望される全てのご利用者が、その人らしい最期を過ごせるようになる事を期待した。また、職員も最期までそのご利用者と関わることで、普段からご利用者との最期の関わりを考えて行動する職員へ成長し、それが今生活しているご利用者へのケア・サービスの向上へと繋がる事になると考えた。

《3. 具体的な取り組みの内容》

○取組み期間

平成23年9月～平成26年6月

○取組んだ職員数や構成

介護職員21名、看護師4名、嘱託医1名

○看取りを開始してから21名の方が亡くなり、そのうち19名の方を看取った。その中の印象深い事例を3件紹介する。

①看取りの際、職員の目の届きやすいお部屋が良いとお部屋を移動したケースがあったが、「今まで過ごしてきたお部屋で最期まで過ごしたい」とご家族の希望があり、お部屋を戻した。そこから職員の見守りの都合だけでなく、その方にとって最期まで過ごしたい場所を優先するようになった。

②駒場苑では7つのゼロへの挑戦という、当たり前の生活を取り戻す、という取り組みをしているが、看取り対応になると、職員の中で絶対安静という意識が先行し、駒場苑の方針からそれてしまい、オムツ、清拭、寝たきり、にすぐになってしまふケースがあった。駒場苑で取り組んでいる7つのゼロは当たり前の生活、その人らしい生活を支える事が目的で行っているのだから最期まで当たり前の生活ができないか、と最期までオムツにしない、希望や体調を見ながら離床や入浴ができる生活を提供するという意識が生まれ、実際に最期までオムツをされないケースや亡くなる2~3日前でも気持ちよさそうに入浴をされるケースも生まれた。そこから、看取り対応とは安静に過ごすのではなく、当たり前でその人らしい生活を最期までして頂く対応の事であると学んだ。

③平成25年6月頃、あるご利用者の看取り後ご家族の「大きな葬儀はせず駒場苑で皆さんに送ってほしい」との希望があり、苑でお別れ会を行った。苑では普通の葬儀のような凝ったことは出来ないが、なるべくご家族の希望に添えるよう葬儀屋に相談し、ご利用者の好きだった曲を流す、ご利用者の作品の展示、ご利用者の写真を飾る、職員から故人への手紙等会場のレイアウトを考えた。式には仲の良かったご利用者を職員がお連れして、お別れする事ができた。ご家族からは「とても良い会にして頂いてありがとうございました」と感謝の言葉を頂き、職員からも「簡単な会ではあったが、生活していた所で顔なじみの職員やご利用者が最期のお別れができるということは心がこもっていてとても良いと感じた」という声があった。その経験から、一緒に生活してきた第2の家族なのだから、死は隠すものではなく、全て送り出そうという意識が芽生えた。

《4. 取り組みの結果と考察》

最期まで慣れ親しんだお部屋で過ごし、オムツにしない、好きなお風呂を楽しむという当たり前の生活をして頂くという事は、看取りになったからやるのではなく、当施設に入所している方全ての方に普段の生活から言えることではないかと気付かされた。看取り対応になったからではなく、普段の生活から当たり前の生活を継続する取り組みが必要であり、これからも7つのゼロを中心当たり前の生活、その人らしい生活を支援し、その先の最期を看取れるよう努めていきたい。

《5. まとめ、結論》

看取りは特別なものではなく、生活の延長である。生活の場で最期を迎える事は自然な事であり、だからこそ、普段から当たり前の生活（7つのゼロ）、その人らしい生活をして頂けるよう努め、その延長としてご本人、ご家族の望む最期を過ごして頂けるよう努める事が大事である。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

鳥海房枝 2011 「介護施設におけるターミナルケア～暮らしの場で看取る意味～」 雲母書房

《8. 提案と発信》

病院は病気を治すことを主たる目的としているため本来看取りを行う場ではない。特養は生活の場として「当たり前の生活の先にある当たり前の最期を迎える場」であるべきだと思う。だからこそ、看取りを行うべきでありその体制を整えていかなければいけない。日頃から、その人らしい生活を支える介護を行いご利用者、ご家族が最期の時をここで迎えたいと思っていただける関係作りが一番大切なではないだろうか。

【メモ欄】